シンポジウム「新型コロナ感染状況下に生きる---都市／大学（教育研究）／市民生活---」

現在、新型コロナ・ウイルスが蔓延していく状況のなかで、都市がもつさまざまな脆弱性が顕わになり、それへの対応に苦慮している。そのなかで、世界的なパンデミックに対応するさまざまな仕組みや生活様式の試行が繰り返されている。都市生活の健全な継続と都市文化を継承しつつ、こうした感染症や巨大災害に耐えうる都市のあり方が問われているのである。今年度の大会では、こうした災禍に直面した都市が抱える課題と今後の可能性についてさまざまな角度からみていくことで、今後都市研究として扱うべきテーマや研究の着眼点・方向性などを掘り起こしていくことにしたい。

シンポジウムのテーマとしては、災禍に晒された都市生活の全般から話題を提供してもらえるように「新型コロナ感染状況下に生きる」とし、都市のロックダウンに至るプロセスにおける問題点や、都市での対策手法や都市政策、医療・保健衛生体制や介護福祉に関わる課題、その他市民生活全般へのさまざまなインパクトや発生した課題など、比較的自由な問題提起と各地の状況・認識を交換し共有しうる機会をつくりたいと思っている。また、多くの研究者が日々関わっている教育研究の現場で実際に何が起こり、それが今後の調査研究のあり方や都市社会のあり方とどう関係しているのか、どう左右していくのか、掘り下げて見ていくことで、都市像が変化しつつある様相の一断面を描き出すことができないか。現在、オンラインを通じたテレワークや教育研究の仕組みが急速に広がりつつあり、それを基礎にした情報社会化・デジタル社会化の動きも加速しているかのように見える。また、災禍に晒されるなかでリアクションとして出てきた動きが、エッセンシャルワークの厳しい実態や都市第三次産業のリアルな存在形態を浮き彫りにするとともに、現代社会における格差や差別意識をさらに助長していく傾向も顕在化しつつあるかのようなのである。ここ数十年に亘って急速に進展してきたグローバリゼーションの大きなうねりのなかで、この災禍はあらためて国家や自治体の役割や機能に注目させる機会を提供したのだともいえよう。その意味で、このシンポジウムはグローバリゼーションの流れのなかで変貌しつつある都市のかたちや都市生活のあり方をあらためて見直す機会になるといえよう。また、このシンポジウムは、ある意味で2016年に日本都市学会特別セッションとして実施された〈新しい都市学〉をめぐる議論を、やや異なるステージで再考し継承する機会でもある。

シンポジウムの話題提供者としては、〈新しい都市学〉に関わるセッションの時と同様に、各地域都市学会から上記のような話題提供をしていただける方をそれぞれ推薦してもらう方式で人選し、形態としてはオンラインでのシンポジウムとして実施する。主たる目的は、新型コロナ・ウイルスの蔓延による影響の広がりや突きつけられている課題を確認し、今後の都市研究に向けての可能性について自由に意見交換を行い、今後の研究の可能性について探索的に問題を探る機会にすることである。是非活発な議論を期待したい。

（コーディネータ 浦野正樹）

話題提供者一覧

車 相龍 （長崎県立大学地域創造学部・教授、九州都市学会）

平 篤志 （香川大学教育学部・教授、中四国都市学会）

石原 肇 （近畿大学総合社会学部・教授、近畿都市学会）

井澤知且 （名古屋学院大学現代社会学部・教授、中部都市学会）

浅野幸子 （減災と男女共同参画 研修推進センター共同代表、早稲田大学・招聘研究員、関東都市学会）

松村 茂 （東北芸術工科大学デザイン工学部・教授、東北都市学会）

森 傑 （北海道大学大学院工学研究院・教授、北海道都市地域学会）